

修士論文(要旨)

2024年1月

三陸方言の語形に関する研究

指導 青山 文啓 教授

国際学術研究科

国際学術専攻

グローバルコミュニケーション実践研究学位プログラム

222J1001

阿部文洋

Master's Thesis (Abstract)
January 2024

A Study of Word Forms in the Sanriku Dialect

Fumihiko Abe

222J1001

Master of Arts Program in Global Communication

Master's Program in International Studies

International Graduate School of Advanced Studies

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Fumihiko Aoyama

目次

1. 序論	1
1.1 はじめに	1
1.2 本稿の文字化の基準と記号	2
2. 先行研究との関係	4
2.1 方言会話の先行研究	4
2.2 場面設定会話『被災地方言会話集』の内容.....	5
3. 壮年層における方言使用の調査と三陸方言会話コーパスの作成	8
3.1 南三陸壮年層の調査内容	8
3.2 壮年層の場面設定会話の内容	9
3.3 場面を設定した三陸方言の会話コーパスの作成	9
4. 三陸方言と東京方言	10
4.1 三陸方言の特徴.....	10
4.2 三陸方言の音素目録.....	11
4.3 音韻、アクセント.....	12
4.3.1 音韻.....	12
4.3.2 アクセント	16
4.4 語彙.....	17
4.4.1 名詞.....	17
4.4.2 動詞.....	19
4.4.3 形容詞	21
4.4.4 副詞.....	23
4.4.5 その他の特徴的な表現.....	23
4.5 文法.....	27
4.5.1 格助詞	27
4.5.2 助動詞	27
4.5.3 終助詞	28
4.5.4 待遇表現.....	29
4.5.5 可能表現.....	31
5. 三陸方言会話コーパスによる語形の分析と結果、語形の様相の考察	32
5.1 語形、見出し語、会話コーパス	33
5.2 語形の分類.....	34
5.3 語形の延べ語数と出現割合	35
5.4 語形の出現割合についての考察	37
5.5 同音衝突を生じる同音異単語	43
6. まとめ	48
参考文献	I
資料	-1-

現在、日本では学校教育等で東京方言を基盤とした共通語で学習し、テレビ等のメディアによってその音声に接触する機会が多いことから、ほとんどの人がその共通語を理解していると考えられる。しかし、地方においては、今日でも共通語とは異なる言語変種である、それぞれの地域の方言が話されている。一方で純粹に方言のみで会話が行われることは少なく、会話中には共通語と方言が混在している。共通語の体系と方言の体系とがどの程度重なり合うのか、また異なるのか、音韻・アクセント、文法、語彙などそれぞれの観点から明らかとなっていることも多い。しかし、実際の会話の中で共通語とは異なる特徴を有する語形が、どの程度見られるのかは明らかではない。

本研究では宮城県北部沿岸地域で話されている言語変種を三陸方言として取り上げ、まず、東京方言と対照して、特徴的な音韻、用法について記述した。次に、三陸方言の語形を東京方言との対応形式によって下記の(a)から(d)の四つの型に分類し、それが会話の総体において、どのように見られるのか、会話コーパスを作成し、明らかにした。このコーパスには、場面をあらかじめ設定した、三陸方言地域の老年層と同地域にある南三陸町の壮年層の会話を用いた。次に、世代による型のあらわれ方の違いがどのような要因から起こるのかについて考察した。

- (a) 東京方言に、音韻、用法ともに共通する語形(共通型)
- (b) 方言間で音韻が対応していて、用法も1対1に対応する語形(音韻対応型)
- (c) 音韻が共通または対応するが、用法に一致が見られない語形(用法非対応型)
- (d) 東京方言にない三陸方言特有の語形(三陸特有型)

また、上記四つの型から、

(e) 三陸方言の音韻により他の語と重複する語形(同音衝突を生じる同音異単語)を取り出し、その出現割合の世代間での違いについても考察した。

結果は以下の通りである。

本コーパス全体において、(a)から(d)の型の出現割合は、述べ語数で(a)65%、(b)23%、(c)3%、(d)9%である。年齢層によらず(a)(b)(d)(c)の順に出現割合は大きいですが、世代によりその割合は異なることが認められた。壮年層では老年層より(a)の型の出現割合が大きく、(b)から(d)に分類した三陸方言の語形の出現割合は小さかった。壮年層では三陸方言の使用が減少傾向にあり、特に(d)の三陸方言に特有の語形が最も使用されなくなっていることがわかった。(b)(c)の音韻対応する語形の出現割合も減少しているが、(d)型ほどの減少傾向とは考えられない。さらに、三陸方言と東京方言の接触により同音衝突する(e)型の語形のあらわれ方から、壮年層では衝突回避のために語形使用に変化が起こっていることが推測できる。

壮年層の三陸方言話者は、東京方言を学び、場面に応じて使い分けをする意識を醸成する中で、三陸方言特有の音韻は残しつつも、方言圏内でのみ通用する特有の語形を用いず、東京方言で表現することの利便性を選択したと考える。そのため、三陸方言の語形は(d)型のような、方言に特有の語形から、世代を下るごとに使用されなくなっているようである。

今後も三陸方言地域では、より東京方言に近い語形の使用がさらに増えていこう。三陸方言の様相が、今後も変化していく過程において、どのような語形からその使用が変化していくのか、または維持されるのか、客観的な分析がさらに必要である。

参考文献

- 浅野建二(編)(1985)『仙台方言辞典』東京堂出版.
- 飯豊毅一/日野資純/佐藤亮一(編)(1986)『講座方言学1方言概説』国書刊行会.
- 井上史雄(1968)「東北方言の子音体系」『言語研究』52. pp.80-98.
- 井上史雄(1986)「文法現象による計量的方言区画」『言語研究』89. Pp.68-101
- 井上史雄(2008)『社会方言学論考』明治書院.
- 上野善道(編)(1989)『日本方言音韻総覧』小学館.
- 上野善道(1989)「日本語のアクセント」『講座日本語と日本語教育 2 日本語の音声・音韻(上)』明治書院. pp.178-205
- 上野善道(2002)「アクセント記述の方法」『現代日本語講座 3』明治書院. pp.163-186
- 上野善道(2018)「アクセントの体系と仕組み」『朝倉日本語講座 3 音声・音韻』朝倉書店. pp.61-84
- 大石初太郎/上村幸雄(編) (1975)『方言と標準語—日本語方言学概説』筑摩書房.
- 大橋純一(1998)『東北方言音声の研究』おうふう.
- 大西拓一郎(2008)『シリーズ〈現代日本語の世界〉6 現代方言の世界』朝倉書店.
- 加藤正信(1992)「宮城県方言」『現代日本語方言大辞典』明治書院. pp.89-92
- 鎌田良二(1965)「東北方言における格助詞サについて」『甲南女子大学研究紀要』2. pp.72-88
- 金田一春彦(1977)「アクセントの分布と変遷」大野晋/柴田武(編)『岩波講座 日本語 11 方言』岩波書店. pp.129-180
- 倉持益子(2009)「新敬語「ス」の使用場面の拡大と機能の変化」『明海日本語』14. pp.25-35
- 国立国語研究所(1966-1974)『日本言語地図』大蔵省印刷局.
- 国立国語研究所(1989-2006)『方言文法全国地図』大蔵省印刷局.
- 此島正年(1968)『青森県の方言』津軽書房.
- 小林隆(2004)「アクセサリーとしての現代方言」『社会言語科学』7-1. pp.105-107
- 小林隆(編)(2006)『方言の文法』岩波書店.
- 小林隆/内間早俊/坂喜美佳/佐藤亜美(2014)「言語行動の枠組みに基づく方言会話記録の試み」『東北文化研究室紀要』55. pp.1-35
- 小林隆(編)『シリーズ〈日本語の語彙〉8 方言の語彙—日本語を彩る地域語の世界—』朝倉書店.
- 佐藤久美子(2022)「関東・東北方言における動詞ラ行音節の撥音化と促音化—COJADS データより—」『国立国語研究所言語資源ワークショップ 2022』.
- 佐藤忠雄(1981)『仙台方言攷 音韻と語法』溪声出版.
- 佐藤亨(1982)「宮城県の方言」飯豊毅一/日野資純/佐藤亮一(編)『講座方言学 4 北海道・東北の方言』国書刊行会 pp.333-361.
- 佐藤亮一(編)(2009)『都道府県別全国方言辞典』三省堂.
- 佐藤亮一(監)(2004)『標準語引き 日本方言大辞典』小学館.
- 真田信治(1983)『日本語のゆれ: 地図で見る地域語の生態』南雲堂.
- 真田信治(編著)(2011)『日本語ライブラリー 方言学』朝倉書店.
- 鈴木孝夫(1973)『ことばと文化』岩波新書.
- 竹田晃子(2020)「可能表現の体系」『東北方言における述部文法形式』ひつじ書房. pp.59-65

- 武田拓(2018)「要地方言の活用体系記述 宮城県仙台市方言」方言文法研究会(編)『全国方言文法辞典資料集(4) 活用体系(3)』 pp.17-28
- 田中章夫(1973)「終助詞と間投助詞」鈴木一彦/林巨樹(編)『品詞別日本文法講座 9 助詞』明治書院. pp.209-247
- 田中宣廣(2005)『付属語アクセントからみた日本語アクセントの構造』おうふう.
- 田中宣廣(2012)「アクセント—三陸地方南部地域—」『宮城県・岩手県三陸地方南部地域方言の研究』 pp.217-227
- 田中ゆかり(2011)『「方言コスプレ」の時代—ニセ関西弁から龍馬語まで—』岩波書店.
- 田中ゆかり/前田忠彦(2012)「話者分類に基づく地域類型化の試み—全国方言意識調査データを用いた潜在クラス分析による検討—」『国立国語研究所論集』3. pp.117-142
- 田中ゆかり/林直樹/前田忠彦/相澤正夫(2016)「1万人調査からみた最新の方言・共通語意識—「2015年全国方言意識 Web 調査」の報告—」『国立国語研究所論集』11. pp.117-145
- 玉懸元(2001)「宮城県仙台市方言の終助詞「ッチャ」の用法」『国語学』52-2. pp.30-43
- 玉懸元(2007)「日本語方言終助詞の研究」東北大学博士論文
- 東北大学方言研究センター(2012)「東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する予備調査研究」文化庁委託事業報告書. pp18-26
- 東北大学方言研究センター(2013)『伝える、励ます、学ぶ、被災地方方言会話集—宮城県沿岸 15 市町—』東北大学大学院文学研究科国語学研究室.
- 東北大学方言研究センター(2019)『生活を伝える方言会話』ひつじ書房.
- 徳川宗賢/佐藤亮一(編)(1989)『日本方言大辞典』小学館.
- 長渡陽一(2016)「二層言語(ダイグロシア)アラビア語の会話体と文章体の単語対応」『外国語教育研究 = JAFLE bulletin』19. pp.74-84
- 中道知子(2022)「東北方言発話動詞シャベルとカタルの特徴的用法」『大東文化大学紀要 人文科学』60. pp.189-200
- 日本国語大辞典第二版編集委員会(2000-2002)『日本国語大辞典第二版』小学館.
- 日本語文法学会(編)(2014)『日本語文法辞典』大修館書店.
- 平山輝男(1957)「補説 北海道母体方言の音調—奥羽方言—」『日本語音調の研究』明治書院. pp.449-524
- 平山輝男(1968)『日本の方言』講談社現代新書.
- 三井はるみ/井上文子(2007)「方言データベースの作成と利用」小林隆(編)『シリーズ方言学 4 方言学の技法』岩波書店. pp.39-89
- 森下喜一(1996)『東北方言アクセントの研究』おうふう.
- 守田美子(2021)「日本語における 2 タイプの「ス」体とその語用論的機能」『人間生活文化研究』31. pp.14-23
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店.
- 山浦玄嗣(1986)『ケセン語入門』共和印刷企画センター.
- 山口明徳/秋本守英(編)(2001)『日本語文法大辞典』明治書院.
- Ferguson, Charles A. (1959). 'Diglossia', *Word*, 15 pp.325-340.